

バイエルクロップサイエンス・種子処理技術センター

研究所
ルポ

バイエルクロップサイエンス(東京都千代田区)は、世界各地で種子処理技術の普及を図っている。バイエルは各国に大豆や小麦などの種子処理技術センターを構えるが、日本の種子処理技術センター(千葉県柏市)では唯一、水稻をメインに研究開発や用途開発を進めている。日本での活動が国内だけでなくアジアの水稻農業の発展につながる。将来を見据えた取り組みに注力する現場を訪れた。

種子処理技術センターは、つくばエクスプレスの柏の葉キャンパス駅からバスで約5分、複数の企業が同居する三井リンクラボ柏の葉1内に設置されている。2014年に開設され、当初は世界中の種子処理技術センターから知識や情報をかき

水稻メイン、`使いやすさ`追求



種子処理技術センター (三井リンクラボ柏の葉1内)

塗抹処理で防除省力化

アプリにレシピ提示機能も

集め、日本で活用するための基盤づくりが活動の中心だった。バイエルは世界の各地域で栽培される作物に合わせて、さまざまな種子処理技術有するものの「水稻は水の中に入れるという、他の作物にはない特徴がある(千葉常則技術マネジャー)」ことから、世界のノウハウを基盤として

集積や新サービス創出にシフトしていった。よりからの生の情報が蓄積され、新たな使用方法やサ

化および減少、農地の大規模化といった課題を解決するための有効なソリューションとなる。種もみに直接薬剤を塗抹処理することにより、箱処理剤と同等の効果・残効性を発揮し、田植え後の本田で病害虫を防除することができると、17年頃から事業化に成功すると、種子処理技術センターの役割は当初の基盤整備からノウハウの

使い勝手のよい手法を考案することで、バイエルシードグロースの普及を早めようと考えた。事業化時は2剤の組み合わせで始まったが、その後3剤の組み合わせに変更された。3剤への変更にあたり、いかに上手に組み合わせるかといったノウハウを集めることに軸足が移っていった(同)という。年月を経るにつれて、実際に使用した農家

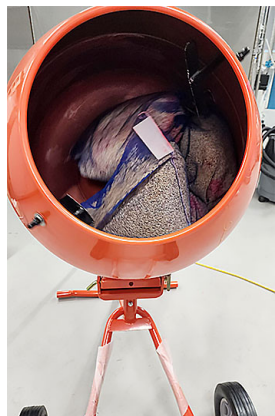
これにより種もみが持ち運びやすくなり、ミキサーに入れたり塗抹後に広げたりする作業が簡便になった。柏では日々、より簡単な処理方法の開発に取り組んでいる(同)。また「塗抹方法がほとんど簡単になっていくと、次は農家がどの薬剤をどの組み合わせで使えばよいのかという疑問が浮上してくるので、われわれはデジタルでの処理を推進している(同)。

その結果、種もみをネットに入れたままミキサー処理できる手法を実現した。

除草剤の処方提案を支援するウエブアプリ「my防除」に、バイエルシードグロースの処方提案に対応した種子処理機能を追加した。農家はアプリ上で移植または乾田直播を選択した後、地域など各設問に答えると、最適な薬剤のレシピが提示される。農家ごとの処方提案することで、さらなる省力化につなが

種もみをネットに入れたまま塗抹できる手法を開発(上)。塗抹後、乾燥させれば作業が完了

今後とも種子処理技術センターでは、農家からの声を集約し、新たなソリューションやサービスの構築に注力していく。



(中尾祐輔)